

と平和をめぐるビザンツ知識人の深まるジレンマという文脈で把握することを試みた。

近世初頭における「異教」との邂逅

——ピコの場合の意義と境界——

比留間 亮平

一四〇一六世紀にかけてルネサンス人文主義運動がイタリアから北ヨーロッパへと広がっていくにつれ、それまでの西欧ラテン世界で失われていた、あるいは名前のみが知られていた古代の文献が次々に発見され、翻訳、印刷されていった。それによって古代の異教世界に関する知識と関心は飛躍的に高まっていったが、そのようなキリスト教以外の知的・宗教的伝統とキリスト教との関係をどのように理解するのかわという問題が生じてきた。ピコ・デラ・ミランドラ (1463-1494) の思想も、そのような試みの一つとして位置づけることができる。ピコは、古代のピタゴラス主義やヘルメス主義、ゾロアスター教やオルフェウス教、それにユダヤ教やイスラム教も含めた、古代から盛期スコラ主義の時代まで連綿と続く人類の知的営為をまとめたある種の宗教史・哲学史を構想した。そしてピコはそれに一貫して共通するある宗教哲学を見いだすことで、彼の言う「哲学的平和」を構築しようと努めた。ピコにおいて特筆すべきなのは、彼がラテン語、ギリシャ語のみならずアラビア語やヘブライ語までも学習し、イスラム、ユダヤの原典に沈潜してその

宗教思想を自家薬籠中のものとしていたという点である。これは一五世紀当時において極めて画期的なことであった。

キリスト教以外の宗教的伝統に対するピコのこのような好意的な態度には、彼のある特異な歴史理解が反映されている。ピコによれば、古代において宗教哲学は極めて調和的で完全な知恵を伝えるものであったが、時代が下るにつれてそれはアカデメイア派、ペリパトス派に代表されるような諸学派に分裂していき、徐々に不均衡で不完全なものとなっていった。そしてアラビア哲学を経て西欧に誕生した当時のスコラ哲学に至っては、諸学派が互いに罵り合う悲惨な状態に陥ってしまっていると考えられた。このような宗教史、哲学史理解に基づき、ピコは当時のスコラ哲学とキリスト教に、古代における真の叡智と宗教を取り戻そうとした。キリスト教以外の宗教的伝統についても憶見なく学び、その知恵を同時代の人々にも広めようとした。ピコの試みは画期的なものであり、「調和の君主 *princeps concordiae*」としての彼の名声を確固たるものとした。

しかし、このピコの「調和」の試みにも大きな問題があることは否定できない。まずその方法論的な問題であるが、ピコは諸宗教、諸哲学の根本的な一致、調和を強調するあまり、それらが用いる用語、概念の間にある差異を完全に無視してしまっている。また、他の宗教的伝統の教説をキリスト教と調和させようとするピコの試みは、当然ではあるがキリスト教の側に立脚するものであり、その目的として異教徒と対話すると言うよりも、それを改宗させようとするものとなっている。ピコはユダヤやイスラムの宗教思想の価値を高く評価しながらも、それ

パネル

を「宗教」という共通の次元でキリスト教と比較し、彼らと対等の立場で対話するということはなかった。諸宗教に通底する宗教的哲学的真理を見いだそうとしたピコ思想は、後の比較宗教学のプロトタイプと言いうるものであるかもしれないが、そこで見いだされた諸宗教に共通する真理とは、やはりキリスト教的なもの以外ではあり得なかった。ここにルネサンスという時代を象徴するピコの意義と限界を認めることができるのではないだろうか。

西欧における仏教理解

—— 認知科学におけるその可能性と問題点 ——

司馬 春 英

最初にF・ヴァレラの認知科学の要点を概観し、彼の独自の立場形成に際しての仏教思想からの影響を確認する。ここでは「表象」主義的「認知」観の仮象性が露呈される。次いで、中観・唯識の対論を瞥見し、この対論を仮象批判そのものの立脚点をめぐる相互批判として解釈する。最後に、以上を踏まえて、自らの仮象性の自覚化はいかにして可能かという問いを提起して、宗教間対話という営みを問い直す契機としたい。

一 F・ヴァレラの認知科学と仏教——観察者という仮象と

「空」

ヴァレラの「イナクティヴ・アプローチ」による「認知」の

定義は、「認知とは表象ではなく、身体としてある行為なのであり、我々が認知する世界は所与のものではなく、我々の構造的カップリングの歴史を通して産出されるものである」というものである。ここから読み取れるのは、第一に、観察者の立場とそこから独立した所与の世界という図式を前提とした「表象」論的「認知」観、つまり近代物理学モデルを支える「Metaphysik」への批判であり、第二に、身体的生命活動に定位しつつ、あらゆる現象をシステムの作動へと回収し、システムそのものに対して意味づける自己回帰的な「Metabiologie」の提起である。彼の中観学派への着目は第一の観点と深く関わる。彼はアビダルマにおける「人無我」をコネクションニズムにおける創発特性と比定し、そこではまだ「法無我」が主題化されていない点について、自存的世界の前提と表象主義の残滓であるとすると、「法無我」を説く大乘中観派に至って初めて、自存的世界という前提を払拭したイナクシジョンの立場に達するのだ。「縁起」思想は彼にとつて、「所与の外的世界の回復としての認知（實在論）」と、所与の内的世界の投射としての認知（観念論）という前門の虎と後門の狼に挟まれた中道の認識論を可能とするものであった。第二の観点は、彼自身は明示していないにせよ、唯識思想、特に阿頼耶識論と深く関わる。私見では唯識論は正に「Metabiologie」の哲学である。「種子生現行・現行熏種子・三法展転・因果同時」とは、阿頼耶識の身体的認知活動が「プロセスの結果がプロセスそのものとなり、操作そのものが自己に回帰する」自己組織的システムとして営まれていることを示している。生命の来歴が世界を行為的に産出